

「伝統文化教育を中心とした教科等横断的なカリキュラムの開発」(2年次)
ーグローバル社会に生きるために必要な資質・能力の育成を目指してー

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-10-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00055804

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



研究主題

伝統文化教育を中心とした教科等横断的なカリキュラムの開発 —グローバル社会に生きるために必要な資質・能力の育成を目指して—

研 究 部

1. はじめに

本校は平成 29 年度より二年間、国立教育政策研究所の研究指定を受け、伝統文化教育に取り組んでいる。本校が伝統文化教育に関する研究に取り組むことになった背景としては、次の二点があげられる。

- ・本校の学校教育目標と伝統文化教育との関連が深いこと。
- ・これまでの本校の教育研究の成果が伝統文化教育の研究に生かせること。

これらのことについて、次に説明を行う。

(1) 研究テーマの設定について

①本校の教育目標と研究の経緯

本校は、教育目標とそれを受けて目指す生徒像として以下のように掲げている。

学校教育目標：「自由闊達な気風の中で、広い視野と豊かな人間性を持ち、将来、社会的使命を果たす生徒を育成する。」

- 目指す生徒像：①自ら考え学ぶ生徒
②お互いに認め合い、助け合う生徒
③心身ともにたくましい生徒

学校全体の教育活動の中でこれらの実現を目指し、日々様々な具体的活動に取り組んでいる。また、これらを踏まえてこれまでも年度ごとにテーマを定め、教育実践研究を行ってきた。

②E S D 研究

平成 26 年度からの三年間は学校教育目標の「社会的使命を果たす生徒を育成する」をより効果的に達成する方策を開発するため、E S D 研究を進め学校の各教育活動に環境学習や国際理解学習を取り入れ、その成果と課題について考察を行った。特に平成 26 年度と 27 年度の二年間は国立教育政策研究所の研究指定を受け、研究発表会などを通して研究の成果を広く発信してきた。E S D 研究に取り組むにあたり、その前年度までの研究の成果と課題について平成 26 年度本校紀要では以下のように述べている。

「本校では昨年度まで、『思考力・表現力・判断力の育成』を目指し、その中でも特に『思考力』に焦点をあて、課題を解決するために必要な思考力を育成するために、1)『思考の型』を取り入れて、2)『思考するための手立て』を工夫するなど、実践を積み重ねてきた。しかし、生徒が課題を解決する方法を各教科等で学んだとしても、その方法が、教科の枠の中でしか使えなかったり、ある単元のみの特化したりするなど、学習したことの広がりを感じられなかった。昨年度の

本校研究紀要にも、『思考の型』や『思考の手だて』を統合するなどして、『思考力を育成する学校全体の取り組みをさらに深めていく必要性』が課題として取りあげられている。すなわち、生徒には、将来、社会の形成者として必要な、教科の枠を超えた課題解決の力が十分に身につけていないといえる。その中で、本校教員も、内容的に類似している取り組みをつなげたり、教科間で連携して共通して身に付けさせたい力を育んだりすることで、学習したことが広がりを見せ、生徒の教科の枠を超えた課題解決の力に総合的につながっていくのではないかと感じ始めていた。そこで、今年度より、教科の取り組みをつなげ、生徒の総合的な課題解決の力を育む方向で研究を行うことにしたが、そのために、教員全体が共通して取り組める課題解決のテーマとして、E S D (Education for Sustainable Development)を取りあげることにした。」

(金沢大学附属中学校 研究紀要第 57 号 2015)

つまり、E S D 研究に取り組むに当たっては、それまでの本校の教育研究の特長として各教科等が積極的に生徒の資質や能力を育成する手立てについて開発をしているということが長所でありながら、同時に教科間で連携して取り組むことや、教科の枠を越えることで育成をねらうことのできる資質・能力についての考察が不足しているという短所があるという課題があった。そこで、それらの長所・短所を踏まえて学校全体で取り組むものとしても、E S D 研究が適していると考え、取り上げることとなった。

③ E S D 研究を基盤とした伝統文化教育研究

前述のように、本校の教育目標と E S D との目指すところの共通点をスタートとし、総合的な学習の時間や特別活動ではなく、普段の教科等の授業の中で展開できる E S D を目指して学校研究を始めた。それまでも、本校では、言語活動に注目した思考力の育成に関する研究や思考の型に関する研究を各教科等が取り組んでおり、学校全体をあげて研究に取り組む体制があった。そこで E S D を進めるに当たっては、全ての教科等が関わることを前提とし、教科等横断的なカリキュラムの開発を目指した。三年間の E S D 研究の取り組みの成果と課題は以下のようなものである。

E S D 研究の成果と課題

ア 成果

- ・本研究は、教科等の授業でこのように E S D の授業ができる、といった実践提案型の研究である。教材の「つながり」を図ったユニットや、E S D の実践事例を数多く完成できたことがまずは成果である。
- ・実践が多い能力・態度に関して、生徒も教科等の授業を通して自分に能力・態度が身に付いたことを実感している。
- ・教科等の授業を通して E S D を実践していく方向性が、教員で共通理解できたことも成果である。
- ・カリキュラムマップの作成により、実践の全体像を可視化できたことが成果である。今後、さらなるカリキュラムマネジメントにつなげていくことができる。

イ 課題

- ・能力・態度と教科等の力のさらなる整合性を図ることが今後の課題である。さらに、それぞれの能力・態度を、各教科等がどのように分担していくかを考え、実践していくことも課題である。
- ・カリキュラムマップをもとに実践が少ない分野や能力・態度の時期をどうするか、また、それぞれの実践を、能力・態度間のつながりも含めて、全体的につなげていくことが課題である。
- ・実践提案型の研究から、実際の諸問題解決の研究へと移行するかどうか、そのためにも、総合的な学習の時間との関係を考え、実践していくことが今後の課題である。

(金沢大学附属中学校 研究紀要第 59 号 2017)

E S D 研究の特長をまとめると、本校の特長として以下のことが挙げられる。

- ・各教科等がそれぞれの教科等の特質を踏まえつつ、継続して実践研究に取り組んでいる。
- ・学校全体のカリキュラムマネジメントに関して、全教科等が積極的に関わっている。

このような本校の教育研究に関する土壌を生かし、伝統文化教育を進められるような研究の体制や方策について考えた結果、以下のように研究テーマを設定した。

研究テーマ

伝統文化教育を中心とした教科等横断的なカリキュラムの開発
ーグローバル社会に生きるために必要な資質・能力の育成を目指してー

2. 研究の方針と目標

伝統文化教育を柱として学校の教育研究に取り組むに当たり、本校の特長を生かす研究とするため、次のように研究の方針と目標を設定した。

研究の方針：各教科等の連携による体系的な伝統文化に関する教育課程の編成、指導方法等の工夫改善に関する実践研究を行い、校内外に研究成果を発信する。

研究の目標：

伝統文化教育に関わって

1. 各教科等で学んだことを自分たちの現在や将来の行動につなげられる生徒を育てる。
2. 教科等横断的なカリキュラムの開発を目指す。
3. 伝統文化教育の推進と各教科等の思考力・判断力・表現力との関連性を明らかにする。

(1) 教科等横断的なカリキュラムの開発について

これまでの E S D の取り組みなどから、本校では教科等が連携して教育活動に取り組む素地がある。この特長を生かして、より効果的な教科等横断的なカリキュラムの開発に取り組むたいと

考えた。教科等横断的なカリキュラムの開発に関しては、平成 28 年 12 月の中教審答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」に以下のように示されている。

「生きる力」の育成に向けた教育課程の課題

(1) 教科等を学ぶ意義の明確化と、教科等横断的な教育課程の検討・改善に向けた課題

教育課程において、各教科等において何を教えるのかという内容は重要ではあるが、前述の通り、これまで以上に、その内容を学ぶことを通じて「何ができるようになるか」を意識した指導が求められている。特にこれからの時代に求められる資質・能力については、第 5 章において述べるように情報活用能力や問題発見・解決能力、様々な現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力など特定の教科等だけでなく、全ての教科等のつながりの中で育まれるものも多く指摘されている。重要となるのは“この教科を学ぶことで何が身に付くのか”という、各教科等を学ぶ本質的な意義を明らかにしていくことに加えて、学びを教科等の縦割りにとどめるのではなく、教科等を越えた視点で教育課程を見渡して相互の連携を図り、教育課程全体としての効果が発揮できているかどうか、教科等間の関係性を深めることでより効果を発揮できる場面はどこか、といった検討・改善を各学校が行うことであり、これらの各学校における検討・改善を支える観点から学習指導要領の在り方を工夫することである。

中央教育審議会 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」文部科学省 2016

また、伝統文化教育を通して育みたい資質・能力を考えた時に、次期学習指導要領に向けた指針としての以下のまとめを参考とした。

平成 28 年 8 月 「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」

現代的な諸問題に対応して求められる資質・能力

(グローバル化する社会の中で)

○グローバル化する社会の中で世界と向きあうことが求められている我が国においては、自国や他国の言語や文化を理解し、日本人としての美德やよさを生かしグローバルな視野で活躍するために必要な資質・能力の育成が求められている。前述(4)で述べた言語能力を高め、国語で情報を的確に捉えて考えをまとめ表現したりできるようにすることや、外国語を使って多様な人々と目的に応じたコミュニケーションを図れるようにすることが、こうした資質・能力の基盤となる。加えて古典や歴史、芸術の学習等を通じて、日本人として大切にしてきた文化を積極的に享受し、我が国の伝統や文化を語り継承していけるようにすること、様々な国や地域について学ぶことを通じて、文化や考え方の多様性を理解し、多様な人々と協働していくことができるようにすることなどが重要である。

※「グローバル人材」…要素 i : 語学力・コミュニケーション能力

要素 ii : 主体性・積極性, チャレンジ精神,
協調性・柔軟性, 責任感・使命感

要素 iii : 異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティー
(グローバル人材育成推進会議)

中央教育審議会 「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」文部科学省 2016

これからの社会において求められる資質・能力の育成を、伝統文化教育を通して行いたいと考えた時、ここで示されている「グローバル人材」の要素 i～iii の育成を具体的な目標とすることができる。また、これらの要素は各教科等で独立して育成できるものではなく、各教科等の枠を越えて育成をねらえるものとして適切である。そこで、本校の研究テーマの副題を「—グローバル社会に生きるために必要な資質・能力の育成を目指して—」とし、その育成に取り組みたいと考えた。

また、育成を求められる資質・能力については前掲の記述に続き以下のようにある。

(現代的な諸問題に対応して求められる資質・能力と教育課程)

○このように、現代的な諸問題に対応して求められる資質・能力としては、以下のようなものが考えられる。

- ・健康・安全・食に関する力
- ・主権者として求められる力
- ・新たな価値を生み出す豊かな創造性
- ・グローバル化の中で多様性を尊重しつつ、現在まで受け継がれてきた我が国固有の領土や歴史に関して理解し、伝統や文化を尊重し未来を描く力
- ・地域や社会における産業の役割を理解し地域創生等に生かす力
- ・自然環境や資源の有限性の中でよりよい社会をつくる力
- ・オリンピック・パラリンピックを契機に豊かなスポーツライフを実現する力

○これらが教科等横断的なテーマであることを踏まえ、それを通じてどのような資質・能力の育成を目指すのかを三つの柱に沿って明確にし、関係教科等や教育課程全体とのつながりの整理を行い、その育成を図っていくことができるようにすることが求められる。

「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」文部科学省 2016

このまとめを参考に、本校でも教科等を越えた視点で教育課程を見直し、教育課程全体として効果を発揮できる場面について研究としたいと考えた。一年次(平成29年度)は全ての教科等が伝統文化に関する学習に取り組み、その中で育むことのできる資質・能力について仮に設定をし、実践研究を進めた。二年次(平成30年度)はその仮説の検証とともに、各実践について検討と精選を進め、教育課程全体の工夫と改善を図っている。

(2) 伝統文化教育について

伝統文化教育は、これまでも各教科等や総合的な学習の時間などで行われて来た。平成18年12月に教育基本法が改正され、「伝統や文化を尊重し、それらを育んできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養う」と言及された。これを受けた平成20年1月の中教審答申「伝統や文化に関する教育の充実」では、以下のように述べられている。

国際社会で活躍する日本人の育成を図る上で、我が国や郷土の伝統や文化を受け止め、そのよさを継承・発展させるための教育を充実することが必要である。世界に貢献するものとして

自らの国や郷土の伝統や文化についての理解を深め、尊重する態度を身に付けてこそ、グローバル化社会の中で、自分とは異なる文化や歴史に敬意を払い、これらに立脚する人々と共存することができる。また、伝統や文化についての深い理解は、他者や社会との関係だけではなく、自己と対話しながら自分を深めていく上でも極めて重要である。このため、伝統や文化の理解についても、発達の段階を踏まえ、各教科等で積極的に指導がなされるよう充実することが必要である。

中央教育審議会 「伝統や文化に関する教育の充実」 文部科学省 2008

伝統文化に関する学習内容は、各教科等で積極的に扱うことが改めて強調されている。またその目的は国際社会で活躍する日本人の育成であることとされている。

現行の学習指導要領の施行と並行して、様々な伝統文化教育に関する取り組みが行われている。その一つが平成 17 年より国立教育政策研究所が行った「我が国の伝統文化を尊重する教育に関する実践モデル事業」である。この事業では全国から 100 校程度を募集し、伝統文化に関する教育の教育課程における位置付け、指導の内容・方法などに関する実践研究、そして外部の人材や団体との効果的な連携の方策について研究の課題として設定した。その事業を経て、平成 24 年には同じく国立教育政策研究所が「学校全体としての各教科等の連携による体系的な伝統文化に関する教育課程の編成、指導方法等の工夫改善に関する実践研究」として研究指定事業を開始し、今年度に至るまで継続して事業を行っている。

また次期学習指導要領へ向けて、様々な動きがある中、伝統文化教育に関しては、平成 27 年 8 月「論点整理」に次のようにまとめられている。

日本のこととグローバルなことの双方を相互的に捉えながら、社会の中で自ら問題を発見し解決していくことができるよう、自国と世界の歴史の展開を広い視野から考える力や、思想や思考の多様性の理解、地球規模の諸課題や地域課題を解決し持続可能な社会づくりにつながる地理的な素養についても身に付けていく必要がある。

中央教育審議会 教育課程企画特別部会 「論点整理」 2015

自国に関することと世界のことを同時に広く捉えて、グローバル社会で生きるための素養を身に付けることの重要性が指摘されている。また平成 27 年 12 月の中教審答申の「2030 年を見据えて子供たちの育てたい姿」には「社会的・職業的に自立した人間として、我が国や郷土が育んできた伝統や文化に立脚した広い視野を持ち、理想を実現しようとする高い志や意欲を持って、主体的に学びに向かい、必要な情報を判断し、自ら知識を深めて個性や能力を伸ばし、人生を切り拓いていくことができること。」と述べられており、これからの社会で広く育成すべき内容について、伝統文化教育が担っていくことが示されている。

このような流れの中で、これまでも伝統文化教育に関する多くの実践が行われてきた。それらの実践の課題として、伝統文化教育を担うのは、総合的な学習の時間に集中しがちであり、各教科等での取り組みが希薄になりがちであるということや、目的が自国への愛着や自国の文化の理解に留まりがちであり、世界的な視野の獲得までに至らないということなどが挙げられている。これらの課題を踏まえた上で、これからの伝統文化教育として「互いの文化を尊重する発信型のグローバル化」を教育の中心に据える実践などが、これからの伝統文化教育が目指す方向として挙げられる。

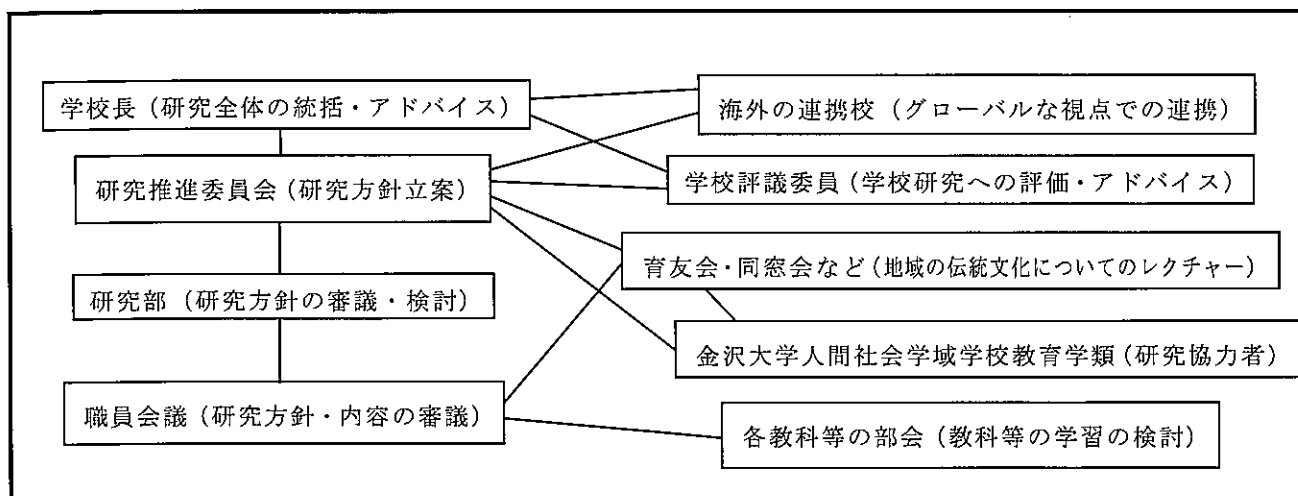
(3) 研究の方策・研究体制

①研究の視点：全ての教科等が関わったこれまでのE S Dの授業実践を基盤とする。教科等の学習をベースとしつつ、伝統文化教育にそれぞれの教科等がどのように関わることができるのかを明らかにし、教科等横断的な単元（題材）の開発をする。その上でそれらの学習の中で伝統文化教育を通して、一人一人の生徒がグローバル社会に生きるために必要な資質・能力をどのように身に付けていくのかを検証し、その育成のためにより有効な方策を開発する。

②研究の手立て：E S D研究を通して得た、教科等の連携やカリキュラムマップ（全ての教科等の三年間の学習の内容やそれらの相互の関連等をの一覧表にまとめたもの）の作成の経験を活かし、伝統文化教育に関して、全ての教科等が関わる三年間のカリキュラムマネジメントを行う。伝統文化教育を柱として、生徒の視点に立った学習計画の作成を試みる。具体的には以下の通りである。

- ・ 伝統文化教育に関するアンケート調査を生徒・保護者・教員を対象に行い、伝統文化や伝統文化教育に関する意識の変容について分析する。生徒の伝統文化に対する興味・関心がどのように高まり、どのような資質・能力が身に付いたのかを分析する。
- ・ 各教科等の授業で生徒の学習過程や思考の様子をワークシートなどの記入の内容から分析する。各教科等で育成したい資質・能力がどのように育まれているのか見取る。
- ・ 本校研究発表会の場で参会者から意見を求めるとともに、アンケート調査を行い本校の取り組みや生徒の実態について成果や課題を点検する。
- ・ 金沢大学人間社会学域学校教育学類等の研究協力者（大学教員・大学院生）、金沢大学教職大学院の職員・大学院生などから学校生活や授業での生徒の変容について評価を得る。

研究体制



4. 一年次（平成 29 年度）の取組

(1) 具体的な取組と実践

○校内研究会

伝統文化教育に取り組むにあたり、平成 29 年度に先駆けて前年度 2 月より準備を始めた。国立教育政策研究所の研究指定の申請にあたり、本校での取り組みの方向性を検討し二年間の研究の進め方について計画を立てた。

①平成 29 年度 4 月～11 月

学校全体で伝統文化教育を進めるに当たり、共通して理解しておくべきことを整理し、具体的な実践の在り方について検討を進めた。学校全体で育成をねらう資質・能力について設定をして、考察を進め、各教科等の授業の中で取り組むことのできる実践の可能性を広げる時期となった。多くの実践を持つことを目標とし、全職員が実践にあたった。

4 月の校内研究会において、研究の計画について全教職員で確認を行った。はじめに、先行の伝統文化教育について概要を把握し、学習指導要領を参考にしながら、今なぜ伝統文化教育に取り組むことが重要なのか、ということについて全教職員が理解し今年度の研究に向けての基礎的理解とした。その中で、本校の研究では、①全教科等が連携して伝統文化教育に取り組むこと ②伝統文化教育を通して育成を目指す資質・能力をグローバル人材の要素 i～iii と仮定して実践に取り組むこと の二つを申し合わせた。学年別のグループに分かれてワークショップを行い、はじめに伝統文化について「生活文化」「伝統文化」「地域文化」「現代の日本文化」などの区分があることを踏まえて、それぞれの教科が伝統文化についてどのような文化を扱い、どのような要素の育成に関われそうかを各自が考えグループごとに表を作成した(図 1)。また、それらの実践の可能性の内容から、実際に今年度中に取り組むものを選び出し、各学年の年間計画表上において各教科等の取り組みを全体で可視化できる表とした(p9 図 2～4)。これらの表を職員室の休憩スペースに掲示し、全教職員の目に触れやすいものとするにより、教科同士が連携したり、教科等横断的な実践について考えたりする材料とした。



図 1

二年間の研究計画(国立教育政策研究所に提出のもの)を基に、具体的な実践に向けた申し合わせを行い、動き出した。前年度までの E S D 研究で取り組んだ校内研究授業(詳細は p9～)の形式を今年度バージョンに手を加えて利用し、どのような伝統文化に関する授業の中で、どのような資質・能力の育成をねらうのかを示せるものとした(p9 図 5)。試みとして 5 月、6 月に行う校内研究授業について、そのねらいなどについて確認をし、各教科等の実践について検討する機会を設定した。

6 月に研究授業をともなう行われた校内研究会では、授業を全校教員が参観し、全体での授業整理会を設け、本校の伝統文化教育の方向性や連携の可能性などについて検討した。4 月より指導を受けている国立教育政策研究所の藤野敦調査官にも参加をいただき、これまでの本校の取り組みや本日の授業、今後の実践について講演会の形でレクチャーを受けた。また、本年度より研究に関する協力をより深めたいと考えている金沢大学教職大学院の教職員、院生にも参加をいただき、研究についての説明を行い、本日の実践やこれまでの研究に関する意見の交換の場となった。

その後、月に一回程度の校内研究会を設定し、実践の進捗状況や研究の方向性などについて、共有をし、各教科等の間の連携の可能性についてさらなる検討を行った。

例年 11 月に開催されている教育研究発表会では、学校保健を含む全ての教科で研究授業を行った。これまでの研究の状況を発信すると同時に、今後の研究や実践の在り方について、国内外の参会者と意見を交換する場となった。

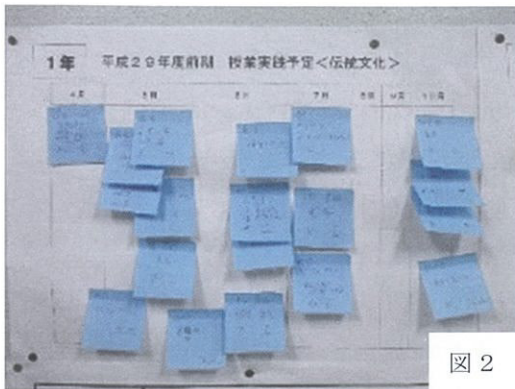


図 2

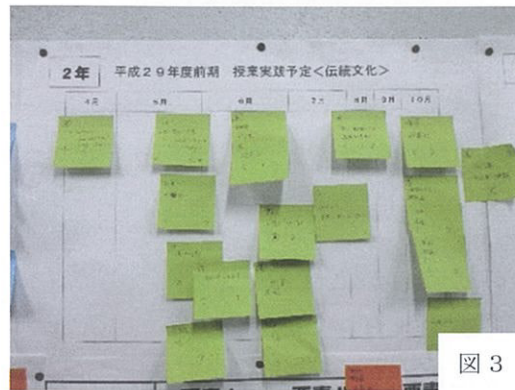


図 3

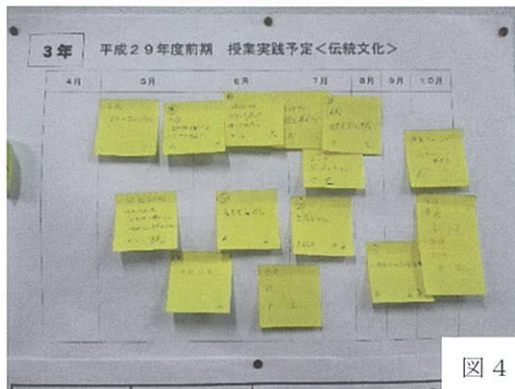


図 4

プ子研 記録用紙

授業者 橋本 正恵	授業日 5月 日() 3限～6限
研究所属	関係・連携の考えられる教科等 1年 1～4組 社会(地理) 英語
扱う伝統文化 ・生活文化 ・伝統文化 ・地域文化 ・現代の日本文化	授業内容 ・「6つの食事の役割」のなかの「食文化の伝承」について理解する。 ・自分の生活を振り返り、これからの生活の工夫につなげる ・日本食の配膳の仕方について学ぶ。
特に関わる要素Ⅰ～Ⅲ 要素Ⅰ：語学力・コミュニケーション能力 要素Ⅱ：主体性・積極性、チャレンジ精神 協調性・柔軟性、責任感・使命感 要素Ⅲ：異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティー	教科等で身に付けたい力(本時について) B(1)ア 「食事の役割」 ・食事の役割について理解する。 ・自分の食生活に興味を持ち、よりよい食習慣について考え、日常生活で実践しようとする
授業のポイント・流れ(見て欲しい部分、要素Ⅰ～Ⅲに関わるポイントなど) 前時までに食事の主な役割として以下の6つを確認しておく。 「生命や健康の維持」「エネルギー」「成長」 「生活のリズム」「人と人とのつながり」「食文化の伝承」 この中から、「人と人とのつながり」「食文化の伝承」を取り上げて扱う。 ともに食事をする中で、コミュニケーションがうまれる。同時に食文化の伝承ができる。 「インド」「ドイツ」「ニュージーランド」の食生活の断面の写真(「地球の食卓」より) ・三大食作法の割合グラフを提示し、日本の食生活との相違点について話し合う。要素Ⅲ ・和食の配膳の仕方について確認する。	<p>世界三大食作法</p> <p>ナイフ・フォーク 30% 箸 30% 手 40%</p> <p>食生活チェックリストを使い、自分の食生活について振り返る。 今後大切にしたい食文化の作法について、考えをまとめる。</p>

図 5

②平成 29 年度 12 月～3 月

11 月までの時期は、伝統文化教育に関わる実践を、数多く重ねることを目標としてきた。それらの実践を受け、29 年度後半は、それらの実践が伝統文化教育として、ふさわしいものであったかや、どのような資質・能力の育成を期待できたのか、などについて考察と検討を行った。次年度へ向けて、実践の精選を行い、教科等間の連携を深めることを目標とした。

○研究授業

前述の校内研究会と共に、様々な形態での研究授業をもった。各学年で行った研究授業では、関係する教員が参観し、以降の連携へとつなげる機会となった。また、全校の職員が会し、行われた研究授業では、学校全体を通じて育成をねらう資質・能力について、設定した内容や育成のねらい方などについて検討をする機会となった。

このような研究授業においては、国立教育政策研究所の調査官を招いて指導を受けたり、金沢大学教職大学院の教員・院生の協力を得たりして、研究を多方面から捉える機会としている。

○授業実践

前述の通り、E S D 研究の取組の中では、今年度の研究にも共通する「全教科等で取り組む」「教科等横断的な実践を開発する」などの目的を持ち、カリキュラムマネジメントを行った。三年間を通じた研究の成果として、全教科等の指導計画を一枚表の形にした「カリキュラムマップ」があげられる。これらの開発のベースになったのが「プチ研」と校内で呼ばれている研究授業である。

「プチ研」は、各教職員が実践を行う際に、簡易な指導案（p9 図5）を作成して全教職員で共有し参観し合う趣旨から行われた。普段の授業について、様々な見方から意見を集めたい時や、他教科等との連携のヒントにしてほしい時などに、「気軽に行える小さな研究授業」という意味合いで「プチ研」と名付けて継承されてきた。本年度もこれらの取り組みを重ねて、試行錯誤を重ねながら大きな研究へとつなげていきたいと考えている。

（2）平成 29 年度（研究 1 年次）の成果と課題

①成果

- ・日本の伝統文化について、生徒の意識や現状などについて明らかになった。
- ・全ての教科等で伝統文化に関わった授業実践を持つことができた。
- ・各教科等のねらいを達成するために、どのような伝統文化に関わる実践が効果的であるのかを検討することができた。
- ・伝統文化を柱として、教科が連携して取り組むことのできる単元・題材を検討することができた。

②課題

- ・生徒や保護者と学習の目標を共有したり、生徒自身がその成果を評価したりする仕組みができなかった。
- ・伝統文化教育を通して育まれる資質・能力の変容を明らかにするための、多様な評価について検討できなかった。

平成 29 年度の研究では、伝統文化教育に取り組む初年度として、第一の目標として、実践の数を多く持つことを掲げた。その結果、学校保健を含む全ての教科等で全ての教員による伝統文化に関わる授業実践を持つことができた。またそれらの実践は、複数教科等で連携が図られたものであり、

今後、その成果を三年間の学習計画として形にしていく計画である。

また5月と12月に実施したアンケートによって、伝統文化に関する生徒の意識や実態を明らかにできた。一方、伝統文化教育によって生徒にどのような資質・能力の変容が見られたかということに関しては、明らかにできなかった。今後、アンケートの内容を始め、多様な評価の在り方についての検討が重要であることがわかった。

研究を進める中で、教育目標や研究活動を、その他の教育活動を俯瞰できるグランドデザインが必要なのではないかという議論が起きた。平成 29 年度は、年度の途中ではあったが、グランドデザインの作成に着手した。平成 30 年度は、この表をもとにして、学校教育の教育活動に関わる生徒・保護者・地域・教職員が目標を共有して日々の活動に臨みたいと考えた。

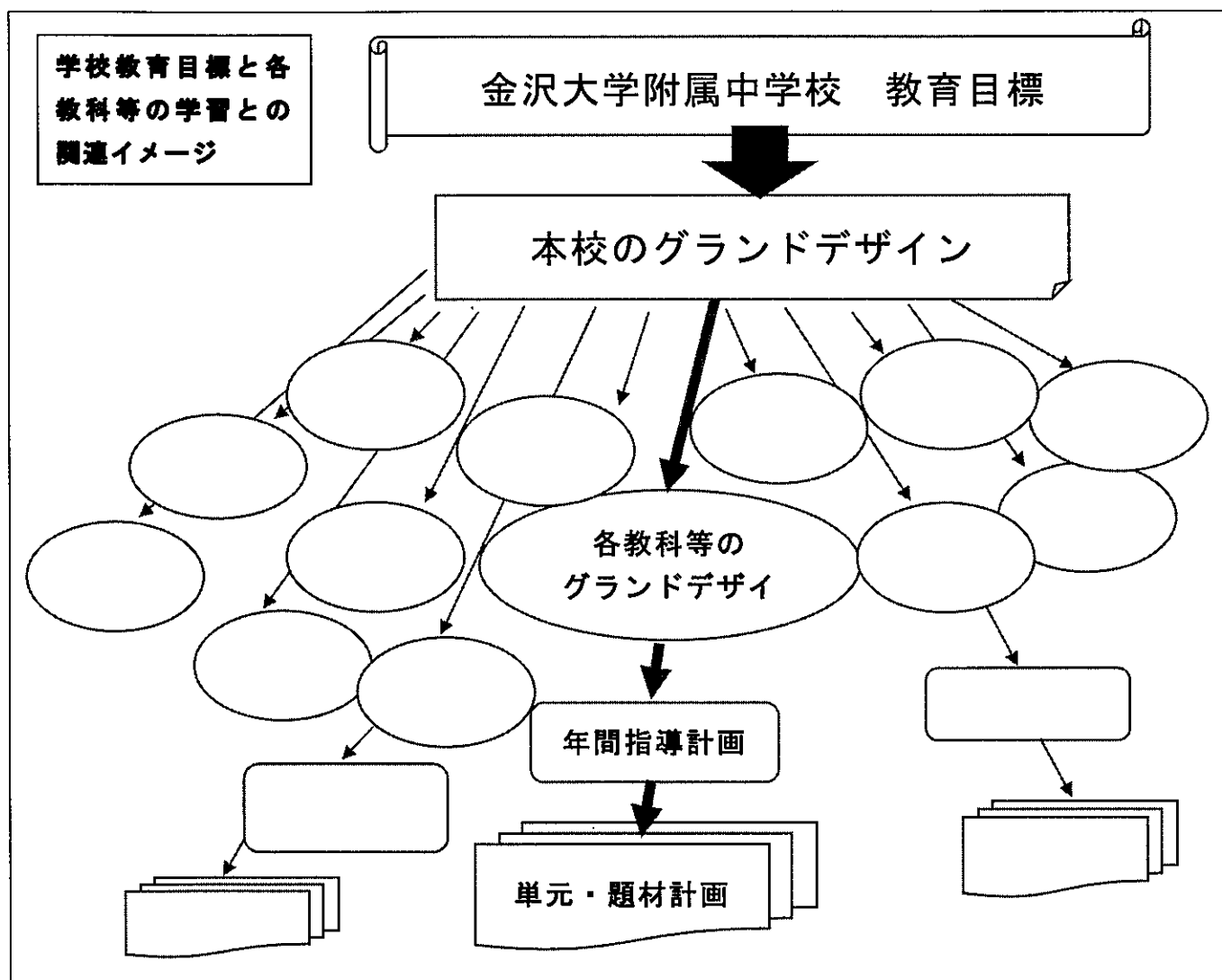
4. 本年度の研究（平成 30 年度）の取組

昨年度の成果と課題を踏まえて、本年度は新たに以下の点を意識して研究に取り組むこととした。

- ・生徒や保護者と学習の目標や学びの過程を共有できる方策をつくる。
- ・伝統文化教育を通して育まれる資質・能力について、その内容についてより明らかにする。

(1) 学校全体のグランドデザインを基にした各教科等の指導の工夫

前述のように、学校全体のグランドデザインを作成した（p19～20）。学校の教育目標を達成するために、学校の全ての活動がどのように関わり、連携して目標を達成するのかを図示したものである。このグランドデザインを拠り所として、今年度は、各教科等がそれぞれの目標を設定し、学習指導の計画を作成し、そこに伝統文化教育も位置付けた。（p21～33）。



また、これまでの学習指導案の形式にも大きく変更を加え、各授業の学校全体の教育活動上での位置付けを明確にし、後述（p15）の学校全体として育成する資質・能力①～③と各授業との関連を示すものとした。各教科等の学習の中で、どのような資質・能力の育成をねらっているのかを明記し、学校全体として、どのように資質・能力を育成していくのかについて、イメージが持てる形式とした。実際に作成された学習指導案（p13～14）を例として詳細についての説明を加える。

これまででは、本時の学習に重きを置きがちであった学習指導案形式に工夫を加えた。p11の図で示したように、「学校全体で育成する資質・能力」「教科の年間指導計画」「単元の指導計画」の位置付けが明確になるような形式とした。教科の学習は、単なる知識や技能の寄せ集めではなく、スパイラルに積み上がっていく中で、様々な資質・能力の育成につながるものである。そのことを、各学習を計画する際に明確にすることを意識している。

4. 単元計画（3時間扱い、本時 は3時間目）

次時	○学習内容（ねらい）・学習活動	指導上の留意点・他教科等との連携	評価規準	育成する資質・能力
一 1	○俳句の特色などを知るとともに、そこに込められた心情や情景を読み味わう。 ・読まれている情景を想像しながら、それぞれの俳句を音読する。 ・俳句に関する専門用語の意味を確認する。 ・筆者のものの見方や感じ方が表れている語句や表現などの意味を確認する。 ・解説を基に、俳句の表現の工夫とその効果について確認する。	○教科と連携しているところに、教科名と内容が書かれています。 ・既習事項を確認するために俳句について知っていることや小学校で学んだことのある作品などを発表する。 ・俳句を作るとき的心情について、筆者が述べていることを確認する。 ・目的意識を持つために第3時に句会をすることを伝える。 【3年英語】：英語で俳句を作る	○この枠には、教科の評価が記入されています。 ・各俳句の単語や季節を押さえ、五句に読まれた情景や心情を捉えることができる。【読むこと】	○日本の伝統や文化に関する理解 ○伝統文化への理解に基づいた多様な文化を尊重する態度 ○文化の伝承・創造への主体性など ○この育成したい資質・能力の三つがどこで養われるか、教科としてどのようなことができるようになるか捉えているかが書かれています。すべての枠に入るわけではありません。
2	○「俳句を味わう」の句を音読し、それぞれの心情や情景を読み味わう。 ・俳句の大意を理解する。 ・季節や情景、作者の感動が表れた言葉を探検する。 ・最も気に入った俳句の一つを選び、心ひかれた言葉や表現についてコメントを書く。	○教科名と内容が簡単に書いてあります。 ・言葉に着目しながら俳句の大意、情景や心情を捉えるためにワークシートを用いる。 ・コメントで取り上げる言葉や表現は、一つに絞ることと単語や切れ字などに着目することを確認する。	・作品の具体的な言葉や表現に即してコメントを書くことができる。【書くこと】	
二 3	○表現のしかたを工夫して俳句を作り、友達と感想を交流する。 ・俳句を作るとき観点を確認する。テーマを決めて俳句を作る。 ○二重線で囲まれているところが単元計画の中に位置づけられた本時となります。 ・作った作品を交流する。 ・各自、よいと思った一句を選び、そのよさを班で伝える。 ・各班から選ばれた一句を全体で紹介する。	・「歳時記」や閑話便覧を活用し、参考にする。 ・ヒントとなるように印象に残った出来事を自由に出し合うことを確認する。 ・語句を吟味し、定型になるようにする。 ・各班で出た意見を基に発表するようにする。	・感動の中心が伝わるよう、語句や語順、表現のしかたを工夫して俳句を作ることができる。【書くこと】 ・選んだ俳句のよさについて、そのよさを説明することができる。 【話すこと・聞くこと】	○【文化の伝承・創造への主体性など】表現を工夫して、日常生活の中での発見や感動を俳句にする。 ○教科として資質・能力に関わる箇所について書いています。

p13～14の単元計画は、今年度11月に行われた三年生理科の天体の学習に関するものである。p16～17で挙げた複数の教科が連携して考えられた実践に関する内容である。二重四角で囲まれた一時間目の部分が「本時」を示し、p80実践事例に当たる部分である。縦の列ごとの内容としては、四列あるうちの左端の列は、教科としての学習内容と活動、そしてそのねらいが示されている。その右隣りが指導上の留意点と他教科等との連携について、示している。その隣の列が教科としての評価規準を示している。伝統文化に関わった学習を計画するに際しても、教科等が目指すねらいを最優先にしつつ、実践に当たることを明確にしている。右端の列は、学校全体として育成する資質・能力＝グローバル社会に生きるために必要な資質・能力（p15）について、この学習で、どの部分の育成をねらうのかについて示している。例に挙げた計画では、1時間目に当たる部分のみに記載があるが、これは単元全体を通じて、前述の資質・能力の育成をねらう学習が冒頭の時間のみであることを示している。この資質・能力の育成に関しては、教科や単元・題材の内容によって、その扱いに違いがある。今後、どのように分担・連携をしていけば、より効果的な資質・能力の育成につながるのかについて、検討を重ねたい。

4. 単元計画（4時間扱い、本時 は1時間目）

次	時	○学習内容（ねらい） ・学習活動	指導上の留意点・他教科等との連携	評価規準	育成する資質・能力
一	1	<p>○月の満ち欠けの規則性を知り、いくつかの情報から、今日の月の形や和歌に詠まれている月の形を予測する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各班で模型を用い、天体の位置関係の変化と、月の満ち欠けの規則性について観察を行う。 ・学習した内容を基に、今日の月はどのような月なのかを予測する。 ・百人一首に出てくる月はどのような月なのかを予測する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・家庭分野で学習した内容を振り返り、日本人が昔から自然との関わりを大切にしてきたことを思い出させる。 ・2年時に国語の授業で生徒が詠んだ歌を例に挙げ、興味を喚起する。 <p>〔3年家庭〕：住まいの工夫 〔3年国語〕：いにしえの心と語らう</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・地球から見える月の形や位置の変化を、月の公転と関連付けて捉えることができる。 <p>【科学的な思考・表現】</p>	<p>【①日本の伝統や文化に関する理解】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・昔から日本人は月の満ち欠けや、様々な時間帯に見られる月に着目し、そこに心情を重ね合わせていたことを知る。
	2	<p>○太陽・月・地球の位置関係の変化によって、日食や月食などの天体現象が起こることを理解する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・映像やモデルを用い、天体の位置関係の変化によって日食や月食が起こることを知る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・前回の授業で学習した月の満ち欠けの規則性について思い出させ、天体の位置関係の変化によって起こることを確認する。 ・日本書紀など、日本の昔の書物にも日食に関する記述があることを紹介し、興味を喚起する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・日食・月食の現象を理解し、太陽・月・地球の位置関係によって起こることを理解する。 <p>【自然事象への知識・理解】</p>	
二	1	<p>○地球から見た金星は、どのような動きをするのかを知り、その原因を考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・太陽と地球、その他の惑星の位置関係について確認する。 ・地球とその他の惑星の位置関係から、金星がなぜ複雑な動きをして見えるのかを考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・明けの明星や宵の明星という言葉を知っている生徒がいれば、その言葉の意味について触れることで興味を喚起する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・金星が星座の星の間を動いて見える原因について、地球と金星の位置関係と関連付けて捉えることができる。 <p>【科学的な思考・表現】</p>	
	2	<p>○地球から見た金星は、どのような見え方をするのかを知り、その原因を考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・模型を用い、太陽と地球、金星の位置関係を変えたときの金星の見え方について観察を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・前回の学習内容を思い出させ、太陽と地球、その他の惑星の位置関係について確認する。 ・模型を用いた観察の際には、地球からの視点で観察するように伝える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・金星の見え方の変化を、太陽・金星・地球の位置関係の変化と関連付けて捉えることができる。 <p>【科学的な思考・表現】</p>	

(2) 学校全体で育成する資質・能力の設定

平成 29 年度には、学校全体で育成を目指す資質・能力として、先述（p 5）の通り、グローバル人材の要素 i～iii を設定した。

※「グローバル人材」…要素 i：語学力・コミュニケーション能力

要素 ii：主体性・積極性，チャレンジ精神，
協調性・柔軟性，責任感・使命感

要素 iii：異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティー
(グローバル人材育成推進会議)

これらの資質・能力の育成をねらって、各教科等の指導を計画したところ、以下の二点の問題点が明らかになった。

- ・各要素の定義が具体的ではなく、学校教育に特化した設定ではないため、各教科等の学習目標や学習内容との関連を示すことに困難があった。
- ・どの要素も、一時間ごとの学習で育成をねらうことは難しく、単元（題材）や他教科等との連携，3年間を通した学習計画などの中で育成ねらわなければならないものである。

これらの問題点を踏まえ、平成 30 年度には、学校全体を通して育成したい資質・能力として、それまでの要素 i～iii をもとに、再度、育成を目指す資質・能力の設定をした。

学校全体として育成する資質・能力＝グローバル社会に生きるために必要な資質・能力

- ①日本の伝統や文化に関する理解
- ②伝統文化への理解に基づいた多様な文化を尊重する態度
- ③文化の伝承・創造への主体性など

これらを設定するために、グローバル社会で生きるために、中学生に必要とされていることはどのようなことなのか、という点に立ち戻り、育成をねらう資質・能力について検討を行った。（学習指導要領総則解説）では、グローバル社会に生きるために必要な資質・能力に関連して、以下のように説明している。

将来の我が国を担う中学生は、郷土や国で育まれてきた優れた伝統と文化などのよさについて理解を深め、それらを育んできた我が国や郷土を愛するとともに、国際的視野に立って、他国の生活習慣や文化を尊重する態度を養うことが大切である。また、国際社会の中で独自性をもちながら国際社会の平和と発展，地球環境の保全に貢献できる国家の発展に努める日本人として、主体的に生きようとする態度を身に付けていくことが求められる。

将来、グローバル化した社会の中で生きるためには、伝統や文化に関する理解，自他の文化を尊重する態度，主体的に生きる態度などが必要であるとされている。これらのことを踏まえて、本校が学校全体を通じて育成をしたい資質・能力について検討をしたところ、以下の三つに整理することができた。

①日本の伝統や文化に関する理解

前年度までの「要素iii：異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティー」を踏まえたものである。グローバル社会に生きるためには、まず一人一人がその立脚する文化を理解することが必要である。日本の伝統や文化のよさについての理解に基づいて、他国の伝統や文化を尊重する態度へとつなげていくことが求められる。

②伝統文化への理解に基づいた多様な文化を尊重する態度

「要素i：語学力・コミュニケーション能力」を踏まえて設定をした。「①日本の伝統や文化に関する理解」を基盤とし、自国の文化を発信したり、異文化との比較をしたりする上で、コミュニケーションは不可欠である。異なる文化を持った様々な人とのコミュニケーションを通して、互いの文化を尊重する態度を育むことができると考えられる。

③文化の伝承・創造への主体性など

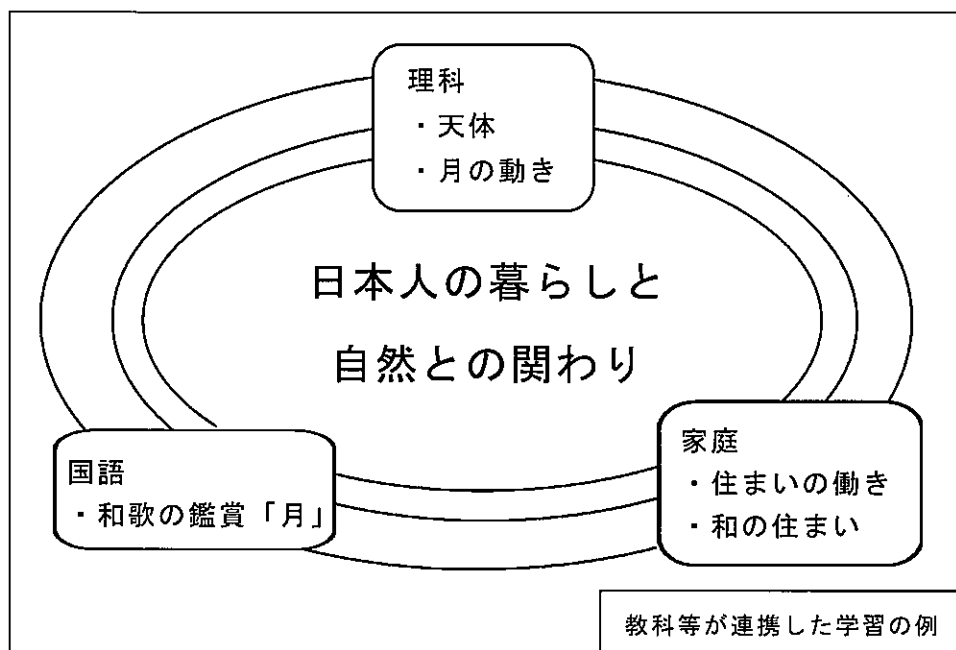
「要素ii：主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感」を踏まえて、設定をした。国際社会の中で独自性をもちながら国際社会の平和と発展、地球環境の保全に貢献できる国家の発展に努める日本人として、主体的に生きようとする態度を身に付けることが目標である。様々な文化を持つ人々と協働しながら、さらに新しい価値観や文化を創造するための主体性を育みたいと考えている。

これら三つの資質・能力は、単独の授業や教科等で育むことのできる性質のものではなく、学校全体の教育活動を通して、三年間を通じて育成していくものである。また、各教科等の学習内容と、これらの資質・能力は関り方には、それぞれ違いがあることも想定される。今年度の取組の一つとしては、各教科等の学習とこれらの資質・能力の育成にどのような関連性があるのかを明らかにすることを目指したい。そのためにも、先述（p16）の学習指導案の工夫において、単元（題材）指導計画の中で資質・能力の育成がどのように位置づけられているのかを明確にすることが、重要であると考えている。

学校全体で資質・能力を育成するために、昨年度に引き続き、各教科等が相互に連携をして学習を構築することを進めている。実践記録にあるものはもとより、普段の学習から、連携を意識して、授業の計画に臨んでいる。

例えば、三年生の国語、理科、技術・家庭科（家庭分野）では、「日本人の暮らしと自然との関り」について、連携して学習に取り入れた。それぞれの教科で、教科としての学習のねらいを明確にしながら、相互に連携することを計画した。このような取組を重ねることにより、学校全体で育成をする資質・能力について、育成を期待できることはもちろん、各教科の学習のねらいの達成により迫れるのではないかと考えている。国語では国語の、理科では理科の、技術・家庭科では技術・家庭科のそれぞれの学習のねらいを明確にした上で、その達成のために用いるべき適切な題材を検討したときに、「日本人の暮らしと自然との関わり」という題材で実践を行うこととなった。時期的には、始めに技術・家庭科（家庭分野）の住まいに関する学習で、日本での伝統的な住まいの特徴について学び、身近な和室と洋室のそれぞれの長所と短所について考える学習を持った。その中で生徒は、幼児や高齢者にとって過ごしやすい環境について理解をしたり、日本人が昔から、暮らしの中に自然を取り入れて生活を楽しんできたことを理解したりした。その上で、月見や花見など、季節ごとに暮らしの設えに工夫を凝らしてきたことが、現代の日本の生活の中にも生きており、自分たちの生活にそれらの工夫を取り

入れていきたいという姿勢につながった。このような学習を生かして、国語と理科が並行して、学習を進めた。理科では、天体の学習の中の「月」の動きや見え方に関する学習で、技術・家庭科での学習を踏まえ、日本人が住まいの中から月を見ていたという状況の理解を生かした学習を設定した。国語では、「月」を読んだ短歌の鑑賞に関する学習を設定し、当時の人々が見ていた月はどのような月なのかということについて考えながら短歌の理解を試みるなど、技術・家庭科と理科での学習を踏まえた学習となった。



三つの教科が連携して学習を設定したことにより、それぞれの教科の学習に関して、より興味・関心が高まり、理解も深まった。各教科の成果と課題の記述にその成果が見られる。

また、各教科が連携する中心となる題材に伝統文化に関する事柄を置いたことにより、学校全体で育成する資質・能力の変容も見られた。学習後の生徒の記述によるアンケートから、その内容を見ることができた。

5. 本年度の研究（平成30年度）の成果と課題

(1) 成果

○学校全体として、伝統文化教育を通して育成したい資質・能力について設定をし、各教科等で実践を重ねることができた。

平成29～30年度の期間で、伝統文化に関わって、資質・能力の育成を目指す授業をのべ80時間以上の実践を持つことができた。

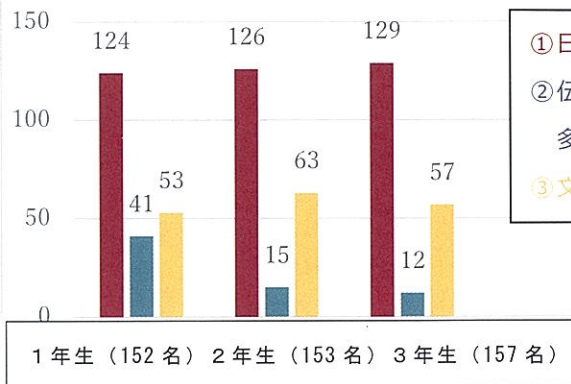
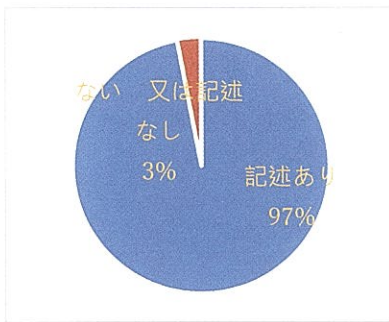
○伝統文化を柱として、教科等が連携して取り組むことのできる単元・題材を開発した。

先に挙げた実践のうちのほとんどが、他の教科等との連携を図ったものであった。

○開発したカリキュラムの実践において、生徒の資質・能力の育成につながる成果が見られた。

生徒の資質・能力の変容を見取るために、平成31年1月に、全校生徒448名を対象にアンケートを行った。伝統文化教育を通して、ほとんどの生徒に資質・能力の変容が見られた。

伝統文化に関する学習を行ったことで、どのような変化がありましたか。



- ① 日本の伝統や文化に関する理解
- ② 伝統文化への理解に基づいた多様な文化を尊重する態度
- ③ 文化の伝承・創造への主体性など

日本に住んで14年間も経たのに、まだまた日本文化について知らないことがたくさんあることが分かった。
 日常生活で、日本ならではの文化に出会ったとき、他の国ではどうなのかを自然と考えるようになった。

① 日本の伝統や文化に関する理解に関する記述の例

これまであまり伝統文化について興味がなかったけれど、興味をもつようになった。外国の伝統について気になった。伝統文化がなくなってしまうようにし、かきと残しておくべきだなと考えるようになった。

「② 伝統文化への理解に基づいた多様な文化を尊重する態度」に関する記述の例

・伝統文化が大切であり良い点や魅力が数多くあることが海外に能く自分の感性に合わないものや、伝統にも多くの問題点が存在すると思いた。また、伝統とは何なのかと考えさせられた。

「③ 文化の伝承・創造への主体性など」に関する記述の例

アンケートの結果では、資質・能力①～③の記述に差がある。このことが、実際にどのようなことを意味するのかについて、今後、生徒へのフィードバックを含めて、再検討をしたい。

また、この結果を踏まえて、アンケートの内容や集計の方法に関すること、実践の是非に関することなどについても、よりよい学習を構築するための材料としたい。

(2) 課題

- 資質・能力の変容を、多様な視点から明らかにする評価方法についての検討には、至らなかった。

次年度は、グランドデザインや各教科等の年間指導計画の改善を踏まえて、その変容を見取る多様な方法について、次年度以降の研究で検討を進めたい。